

筑波研修便り「南部アフリカコース編」

2004 年 3 月 2 日に来日し、毎日講義や実験実習を続けていた南部アフリカ地域特設野菜畑作技術コースの 6 カ国 7 人の研修員は 5 月 10 日から 15 日にかけて九州への研修旅行にでた。この研修旅行では、1) 宮崎県綾町の有機農業（有機物利用・土壌保全）、2) 宮崎県都城市にある国の試験研究機関の役割と技術普及、3) 熊本県阿蘇郡波野村のキャベツ栽培、4) 佐賀県白石町のタマネギ栽培、5) 長崎県島原半島愛野町のバレイショ栽培を見学した。つくば市を数日離れることになるこの研修旅行は、もちろん研修のためのものではあるが、研修員にとってつくばの日常から離れる楽しい企画でもある。



宮崎県綾町の照葉大吊橋：わたし達は「綾の照葉大吊橋（てるは大吊橋）」に向かうため宮崎県綾町照葉樹自然公園内の緑豊かな川沿いをバスで走った。この研修旅行の宮崎県部分に参加した我が社の社員が、カシ、シイ、クスなどが競いながら成長し、照葉樹林という自然生態系を形成していることを説明しながらバスは走っていった。美しい渓谷美をながめながら、ナミビアの研修員が一言「天国のようね」。研修をスタートした 3 月に実施したカントリーレポートで、彼女はどこまでも広がる土漠の写真で自分の住む地域を紹介した。自分の住む地域とこの緑豊かな照葉樹林を比べて彼女は感嘆してしまった。

宮崎県綾町の有機農業：綾町は宮崎県のほぼ中央部、宮崎市から西北 20km に位置している。ここで有機栽培農家を訪問した。綾町では、自然の摂理を尊重した農業を推進するため、1985 年、全国初の「自然生態系農業の推進に関する条例」を制定し、綾町有機農業開発センターを中心に有機農業を推進している（AAI ニュース 33 号参照）。今回はじめて有機栽培農家に会って研修員はさらに有機農業について関心をしめした。このコースには有機農業に関連する課題として堆肥、ボカシ、クタン実習があるが、将来的に有機農業分野をどのように研修カリキュラムに取り入れていくか整理する必要がある。ただ、研修員に勘違いしてもらいたくないことは、日本では有機農業はまだマイナーであるということ。



熊本県阿蘇郡波野村のキャベツ栽培：農林水産省から表彰された波野村のキャベツ農家 S 氏を訪問した。優良な営農がその表彰の理由だ。S さんは妻と 2 人の家族労働で 3ha の畑地をこなしている。2 人で育苗管理と移植後の作物管理に従事し、労働のピークである定植作業や収穫作業には家族外労働に頼っている。S さんは育苗がもっとも大事であると研修員に説く。この S さんに対し、研修員からいろいろと質問がとんだ。それに答えて、育苗中にオフタイプの苗を取り除き本圃には均一な苗を移植しなければいけないこと、そのためには育苗期間中に入念な観察が必要であることを説いた。育苗中の実物苗を使って、研修員にその苗色や苗型を示しながら説明してくれた。研修員にとって「苗半作」の意味が理解できたことだろう。

長崎県島原半島愛野町のバレイショ栽培：ここでは、若い後継者と会う。積極的に自分の地域を守ろうとしている若い世代や、かれらと協力関係にある長崎県試験場や担当普及センターを知ることができた。日頃、後継者不足の話を知っているのになぜ?? この点を理解するには滞在時間があまりにもみじかかった。研修旅行を計画するとき頭が痛いのが、研修員にいろいろな所を見てもらいたいがため、見学先が盛りだくさんになってしまうことだ。見学先が多いと旅行日程がきつくなってじっくり見学できない。この愛野町のバレイショ農家訪問は、はじめての企画ということもあって、若手農家のほうにためらいが感じられた。この緊張を解きほぐすのはわたし達研修指導員の仕事でもある。



長崎平和公園：平和公園では観光気分で周りの修学旅行学生と団欒していた研修員も長崎原爆資料館に入ったとたん沈黙してしまった。2 時間近くじっくりと資料館を見学した研修員はぐったりしたようだ。農業研修のコース目的とは離れるが日本の歴史を知り、自国の歴史と比較するといった学びの姿勢に真摯な態度を感じた。

（九州研修旅行にて：長谷川、小野）